

# ルソーは精神分析家か？<sup>\*</sup>

Rousseau, psychanalyste?

ブリュノ・ヴィアール  
永見文雄 訳

## 要 旨

心理学者ルソーの豊かな革新の数々を示したい。ルソーは原罪を退け人間の自己愛を正当化したが、自己愛の対極にある自尊心をも重視した。自尊心とは他者の視線に対する気遣いだ。自尊心の危険を示したのはルソーが最初でなく、十七世紀のモラリストがルソーの先駆者である。人間には性的欲求・物質的欲求・承認の欲求の三つの基本的欲求があるが、ルソーには承認の欲求にはかならない自尊心の正方形が見られる。虚栄心が他者への軽蔑を生み、羞恥心が羨望を生む。傷ついた自尊心にはこの四つの顔が認められ、四者は緊密に結びついている。ルソーの自伝作品には虚栄心と軽蔑、羞恥心と羨望の組み合わせがしばしば見られる。ルソーの延長上にヘーゲル、ジラール、アドラー、サルトルを置くことができる。ルソーの作品にはホリズムと個人主義の両極端が同居している。ルソーが提供する精神分析の道具によって、ルソーの敗北がすなわちルソーの勝利であることがよくわかる。

## キーワード

ルソー、精神分析、自尊心、ホリズム、個人主義

仏教がかくも深く根付いている日本でフロイトの精神分析が今日どういう影響を及ぼしているか、正直のところ私はよく知らない。十分な能力がないから仏教について語るつもりはないし、今日のテーマでないのでフロイト理論についてもほとんど語らない。仏教とフロイト理論の二つの英知に照らして私がルソーについて何が語れるかは、聴衆の判断にお任せしたい。

フロイトは「精神分析」(psychanalyse)という言葉を生出したことで有名だが、結局誰もが知っている二つの言葉を結び合わせただけである。「精神分析(プシカナリーズ)」とは、プシケ(psyché)〔精神生活全体〕すなわちアーム(âme)〔魂〕のアナリーズ(analyse)〔分析〕だ。無意識を生出したとも言われているが、これは乱暴な誇張だ。それはあとでわかるだろう。ルソーを「精神分析家(psychanalyste)」と形容するのはいささか逆説めいていて挑発の気味があるのはもちろんのことだが、しかしながらそれをとにかく試みることにして、この方向でどこまで行けるか見てみることにしよう。

ルソーはたくさんのものを生出したと言われているが、特に偉大な心理学者だったと言われているわけではない。ルソーは『新エロイーズ』で情熱恋愛を、『告白』で自伝を、自然に対する極度の趣味ゆえにエコロジーを、『社会契約論』で共和国を、『エミール』で近代的な教育を、個人のオリジナリティの誇張によってロマン主義を生出ないし再创出した。これだけでもたいしたことだが、だからといって、心理学者ルソーの豊かな革新を示そうという私の企ての腰が折られるわけではない。

『不平等論』の註に見られる一文から始めたい。ルソーは、フランス語ではその名称がよく似ているけれども完全に異なる二つの感情を区別する。

「自尊心(amour-propre)〔利己愛〕と自己愛(amour de soi-même)〔自愛心〕を混同してはならない。この二つの情念はその性質から言ってもその効果から言っても非常に違ったものである。自己愛は一つの自然な感情であって、これがすべての動物をその自己保存に注意させ、また人間においては、理性によって導かれ憐みによって変容されて、人間愛と美德を生み出すのである。自尊心は相対的で人為的な、社会

ルソーは精神分析家か？

の中で生まれる感情にすぎず、それは各個人に自己をほかの誰よりも  
重んじるようにしむけ……」<sup>1)</sup>〔『不平等論』第一部〕

ヨーロッパでは千五百年前から、聖アウグスティヌスの弟子の神学者たち、すなわち大方の神学者たちが、アモール・スイ（amor sui〔自己愛〕）とアモール・デイ（amor Dei〔神への愛〕）を対照させ、神への愛だけが正当なものである、なぜなら人間は原罪によって完全に墮落したから、と主張している<sup>2)</sup>。ところがルソーはたいへんな革命をやったのけたわけで、十八世紀の「啓蒙主義（les Lumières）」と呼ばれるものに典型的な革命だ。つまりルソーは原罪をしりぞけ、人間は本性からして善良だと明言する。人間が自分を愛する権利があるのは人間が善良だから、というわけだ。これは神学上、人間学上、たいへん大きな革命である。アウグスティヌスの言うところによれば、アモール・スイ（自己愛）は重大な誤りである、というのは、人間は誰であろうと誰かに愛されるに値するにはあまりにも邪悪だからだ。自己を愛すること、それは経験するに値する唯一の愛を神から奪うことだった。ところがルソーは突然、自己愛はよいことで正当だと明言する。我々の安全と健康に配慮することは性的快楽、食の快楽、そして生活の上でのほかのすべての快楽同様、自然でノーマルなことなのだ。

しかしながらルソーは限界を設ける。自己愛がよいものだとするれば、もう一つ別の非常に違った感情が存在する。自尊心〔利己愛〕だ。これはあらゆる不平等と暴力の原因である。自尊心とは何か<sup>3)</sup>。自尊心は比較する感情だとルソーは言う。つまり各人は自分を他者と比べ、自分の眼からだけでなく他者の眼から見ても、いっそう多くの尊敬に値したいと願う。自尊心はしたがって他者の視線に対する気遣いであり、外見への気遣いなのだ。性的欲望が他者の肉体を所有したいと願うのに対して、自尊心は他者の尊敬（esteem）と賛嘆（admiration）を得たいと願う。

この点で我々はおおきな問題に遭遇する。というのも、フロイトが人間のプシケの中心に置くのは性的欲動であることを我々は知っているからだ。ルソーは反対に人間のプシケの中心に自尊心を置く。どちらが正しいのか？ 数年後にヘーゲルはルソーにならって「承認（reconnaissance）の欲求〔必要〕」を（ヘーゲルはこれをアネルケンヌンク *Anerkennung* と呼ぶ）強調する。ヘーゲルにとって人間は二つの欲求を、植物にいたるまでのすべてのほかの生きている存在と共有している、すなわち、性的欲求と食の欲求である。けれども、人間の固有性は承認、あるいは尊敬（同じことだ）の欲求のなかにある。およそ人間のすべての社会性（*sociabilité*）の豊かさとは複雑さを作るのは、この承認または尊敬の欲求である。

ルソーは楽観主義の思想家ではない。もちろんルソーは原罪をしりぞけ、性的行為は「あらゆる行為のなかでもっとも自由でもっとも甘美なもの」だとまで言う。無人島にいる未開人やゆりかごのなかの赤ちゃんは心の奥底に刻印された悪徳を持っていないと明言することは重要だが、しかしルソーは、人間が同朋と接触して暮らし始めるや否や生じる、自尊心（*amour-propre*）の恐ろしい結果を描いている。

『不平等論』の二十年後、最初の定義を補ってルソーは次のように書く。

「原初の情念は原理として自己愛しか持っておらず、その本質からして人を愛する正しいものです。けれども原初の情念が障害によってその対象からずらされ、対象に到達するために対象に専念するより、障害をしりぞけるために障害にいつそうかかずらわるとなると、善良で絶対的な感情である自己愛（*amour de soi*）は自尊心（*amour-propre*）となってしまいます。自尊心とは、相対的な感情であって、それによって自分を比較する感情、えり好みを要求する感情、その享受が否定的であるような感情、もはや我々自身の幸福によってではな

ルソーは精神分析家か？

く、他者の不幸によってのみ自分を満足させようとする感情なので  
す。』<sup>4)</sup> [「第一対話」]

我々の欲望が障害によってその対象に到達することを妨げられるとルソーが言う時、ルソーは人間の障害のことを言いたいのだ。障害とは、他者である。お金を得るため、女性の愛を得るため、あるいは競技でメダルを得るために人々が競い合うとき、人々が互いに障害となるのは明らかだ。全員が一番美しく、一番裕福で、一番魅力的になることはできないし、全員が最良のポストを得ることもすべての競技に勝つこともできない。競争関係においては、競争者は自分が狙っている対象を忘れ、ライバルを出し抜くことにしか、そしてうまくライバルを打ち負かした時にライバルたちの敗北を喜ぶことにしか、もはや興味がなくなるということが往々にして起こる。そういう逸脱と墮落をルソーは描いているわけだ。

五十年前にルネ・ジラルは無意識的模倣（mimétisme）の理論で有名になった。人間には互いに模倣し合う、すなわち他者がすでに欲していることを欲するという、抵抗し難い傾向があることをジラルは示した。この感情には名前がある。羨望だ。羨望があると、狙っているのは現実には物質的对象ではなく、むしろ声望であり、勝つ悦びであり、価値を認めている人物と同じかそれ以上の価値を持っているという感情である。というのも、人が羨望を感じるのはただ自分より優っていると評価できる人たちに対してだけだからだ。だからルネ・ジラルはルソーが自尊心の名前で語っていたことを無意識的模倣の名前で発展させ敷衍したのだ。ジラルは恐ろしい暴力のスパイラルを描いたが、それによれば、人間は殴られたら殴り返すのであり、競っている対象を破壊することになるのは覚悟の上で、ライバルにどうしても勝ちたいと思うものなのだ。

## ルソーの先駆者たち

ルソーはだから対象に対する欲望を復権するわけだが、しかし自尊心の競争（虚栄心の競争とも呼ぶことができる）の危険を示す。実際には自尊心も虚栄心もルソーが創出したわけではなかった。十七世紀の古典主義のモラリストたちはすでにこうした概念を元にして豊かな精神分析を展開していた。パスカル、ラ・ロシュフーコー、ラ・ブリュイエール、ピエール・ニコル、ジャック・エスプリ、そのほかのことである。これらの人々は大部分がジャンセニズムの宗派に属しており、ジャンセニストは聖アウグスティヌスの後継者であるから、キリスト教のもっとも厳格な潮流に属していた。ルソーに一世紀先立つパスカルの『パンセ』の断章を例に挙げよう。この断章では、自尊心（amour-propre）という単語が最初は単なるエゴイズムを意味しているが<sup>5)</sup>、次いでずれて行って、各人が自分の眼と他者の眼に対して求める偽の尊敬を意味しているのがわかるだろう。

「自尊心（amour-propre）とこの人間の自我との本性は自分だけを愛し、自分だけしか考えないことにある。だが、この自我は、どうしようというのだろうか。彼には、自分が愛しているこの対象が欠陥と悲惨とに満ちているのを妨げることはできないだろう。彼は偉大であろうと欲するが自分が小さいのを見る。幸福であろうと欲するが、自分が惨めなのを見る。完全であろうと欲するが、不完全で満ちているのを見る。人々の愛と尊敬の対象でありたいと欲するが、自分の欠陥は人々の嫌悪と侮蔑にしか値しないのを見る。彼が当面するこの困惑は、想像し得る限りもっとも不正でもっとも罪深い情念を、彼のうちに生じさせる。というのも、彼は、自分を責め自分の欠陥を確認させるこの真理なるものに対して、極度の憎しみを抱くからである。彼はこの真

ルソーは精神分析家か？

理を絶滅できたらと思う。しかし、真理をそれ自体においては絶滅できないので、それを自分の意識と他人の意識のなかで、できるだけ破壊する。」<sup>6)</sup>〔ブランシュヴィック版断章番号一〇〕

パスカルが語るこの真理への憎悪は我々が「抑圧 (refoulement)」と呼ぶところのものと異ならない。古典主義のモラリストたちは我々が「無意識」と呼ぶところのものを指すのに「アンスクリュタブル (inscrutable) [吟味不可能なもの]」という言葉を用いていた。ラ・ロシュフーコーは書いていた。「自尊心 (amour-propre) の深淵の深さを推し量ることも、その闇を貫くこともできない。けれども自尊心を自らに隠している暗闇も、自尊心が自分の外に何があるかを完全に目にすることを妨げることはできない。その点において、自尊心は、すべてを見出しておりながらただ自分自身にだけは盲目な我々の眼に似ている。」<sup>7)</sup>〔削除された箴言一〕

ルソーはしたがって情念についての素晴らしいフランス分析学派、すなわちジャンセニスムの後継者である。ジャンセニストたちは一六四九年にサミュエル・ソルビエールによって仏訳されたトマス・ホッブズの『市民論』(一六四二年)の読解に強い影響を受けていた。英国の哲学者〔ホッブズのこと〕自身、聖アウグスティヌスの影響下にあって、栄光 (glory) への欲望を人間が熱中する死闘の起源に置いていた。ルソーはホッブズを最良の敵とした。ルソーはホッブズの敵対者であると同時に後継者でもある。敵対者だというのは、ホッブズが悪を人間の心に根付かせているからであり、後継者だというのは、ルソーがホッブズの自尊心についてのやりきれない分析を発展させているからだ<sup>8)</sup>。

### 欲求の三角形

私は人間の三つの基本的な欲求に言及した。性的欲求、物質的欲求、承

認の欲求（＝自尊心）である。この三つの欲求のあいだの関係、そのとりあえずのヒエラルキーの問題が出来する。マルクス主義はその全盛時にただ物質的欲求にのみ基礎を置く人間学を提出した。他方フロイトは、性的欲望を強調した。ルソーが自尊心を優先するのはいま見たばかりだ。だが自尊心は他の二つの欲求といかなる関係を結ぶのか？『不平等論』第二部はこの問題に答えることを可能とする。性的欲求と物質的欲求はどちらも正当なる自己愛に属するのだが、それらは自尊心の行為によって強力に掻き立てられ、活発にされ、墮落させられるということをルソーははっきりと示している。

自然人にとっては、「女でさえあれば誰でもよい」、そして「欲求が満たされれば、欲望はすべて消えてしまう。」<sup>9)</sup>〔この二つの引用は、第二部ではなく、第一部末尾〕我々があれほど誇りに思う愛のえり好みにルソーがいかなる価値も与えていないのを見て、人はおそらく驚くだろう。社会と共に、とルソーは記している。

「人々は比較をすることに慣れ始める。知らず知らずのうちに取り柄と美しさという観念を獲得し、これが好き嫌いの感情を生み出す。優しく甘美な感情が心のうちに忍び込み、僅かでも反対されると、激しい怒りとなって燃え上がる。恋愛と共に嫉妬の気持ちが目覚める。不和の女神が凱歌をあげ、情念のうちでももっとも甘美な感情が人間の血の犠牲を受け取るのだ。」<sup>10)</sup>〔第二論文第二部〕

目覚ましい逆転によってルソーは、恋愛が自尊心で色づけされた時に血と恋愛を近づける。ルソーが考えているのはトロワの戦争、嫉妬心のあらゆるドラマ、我々のすべての恋の悲しみ、カップルのあまりにも痛ましいすべての喧嘩だ。ここに恋愛の心理学に広大な領野が開かれる。美の探究そ



ルソーは精神分析家か？

れ自体が、恋愛においてはあんなにも大切なものののに、我々の競争心の産物にほかならないように見える。美に対する熱狂的な好き嫌いは、誰もが所有したいと思うような女性あるいは男性を所有したいという欲望と解釈される。もし私が世界でもっとも美しい女性をうまく誘惑することができたなら、私のライバルたちは私の勝利の嫉妬に満ちた証人となるだろう。

その上、のちにヘーゲルの言う通り、人間の欲望は「欲望されたいという欲望」だ。したがって、外部の視線を考慮に入れなくとも、カップルそれ自体が二つの自尊心の対話である。カップルの各人が、ある所与の時に自らもっとも望ましい〔欲望するに値する、情慾をそそる〕と判断した存在によって欲望されているという事実によって、得意になる。自尊心が受ける愛撫は身体が交わす愛撫と結びつき、それに劣らず官能的なものとなる。この二種類の愛撫は互いに刺激し合う。以上が、ルソーのテキストが可能とする分析だ。

そしてもし私の意見を求められるなら、サディズムとマゾヒズムは自尊心が受けた傷の性〔性生活〕に対する結果だと付け加えよう。これらの指摘から次のことが明言できる。つまり、情動のゆがみを説明するのは性のアクシデントであるどころか、性の有為転変を理解することを可能とするのは自尊心の損傷なのだ、ということである。

ルソーは自尊心と物質的幸福に対する欲望のあいだの同じたぐいの結びつきを示してみせる。

「自分の利益のためには実際のあるがままの姿とは別に自分を見せなければならなかった。存在と外見は二つの異なるものとなった。[……] むさぼるような野心、本当の欲求からではなく、他人に優越したいがために、他人より大きな財産を獲得したいという熱意、これがすべての人に、互いに相手を害しようとする邪な傾向を抱かせるのだ。」

結果は、

「ごく少数の権力者と富裕者が権勢と富の頂点に立っている一方で、大多数の人々は暗闇と貧困のうちに這いずり回っているのが見られるとすれば、それは権力者と富裕者が、他人が所有していないものを持っている限りにおいてのみ、自分の享受しているものを高く評価しているからであるということ、そして大衆が悲惨でなくなれば、権力者や富裕者は、たとえ身分がそのままでも、幸福ではなくなるだろうということ [を私は証明するだろう。]」<sup>11)</sup> [第二論文第二部]

『不平等論』には当然のことながら所有権に対する前マルクス主義的な批判が見られる。柵と囲いに激怒してルソーが次のように叫ぶ雄弁さに満ち満ちた一節は誰もが覚えている。「もしも君たちが、果実は全員のものであり、土地は誰のものでもないということを忘れたら、君たちは終わりだぞ！」より繊細な読解はしかしながら次のことを示している。すなわち、自尊心は性的な事柄同様所有権についても、不平等の下部構造である、と。「人は富裕になるためには何でもする。けれども、富裕になるのは重んじられるためなのだ。」<sup>12)</sup>

ピエール・ブルデューが経済資本 (capital économique) と象徴資本 (capital symbolique) の区別を提唱しているのは知られている。人間が同朋に対して自分のために集めることのできる承認 (reconnaissance) の領域にのみ属する非物質的資本を象徴資本とブルデューは名付ける。ブルデューの見るところ、経済資本の蓄積のための闘いは、ブルデューが順位付けのための闘い (lutte des classements) とも呼ぶところの象徴的闘いを統括し決定する。ルソーにおいては、その反対だ。人々が必要以上の富を蓄積しようとし、その結果大多数の人間の貧困化にいたるのは、物質的必要からひとた

ルソーは精神分析家か？

び解放された人々の最初の動きが象徴的支配のため競争することだからである。このことは、競争が欠乏の結果であると考える代わりに、欠乏と窮乏が競争の結果であると考えさせることになる。自尊心はしたがって我々の性的生活の川上にあるのと同じく、階級闘争の川上に位置づけられるべきだ。順位付けのための闘いがそこでは階級闘争の下部構造として姿を現す<sup>13)</sup>。だから、暴力と支配はもはや富を唯一の目的とはしない。アイデンティティや声望などの探究も考えに入れる必要がある。そして富それ自体が、消費とおなじくらいひけらかしの問題となる。

ルソーは三角形の人間学を手ほどきする。社会生活の産物である承認の欲求が、植物にいたるまですべての生命ある存在によって自然に共有されているところの、ほかの二つの欲求を強力に多元決定しているのだ。『告白』〔第三巻〕の或る場面<sup>14)</sup>が三角形の三つの頂点を集めている。ジャン＝ジャックはゲーヴォン家の従僕で、食卓で給仕するブレイユ嬢の人柄に執着している。立派な貴族の家で仕える悦びに、自分の価値を正当に評価されない屈辱感が混じり合う<sup>15)</sup>。彼はもちろんこのお嬢さんに恋をしている。ある日のこと、夕食での会話がラテン文法についての問題を巡って行われると、ジャン＝ジャックは居並ぶ人たちがびっくりするのをしり目に学識を披露するまたとない機会を手にする。娘はその賛嘆の念を見せるがまににする。ジャン＝ジャックは何年もたったあとまで忘れなかったこの瞬間、「自尊心のオルガスムス」を経験しているのだと、私なら言おう。この瞬間は例外的だ、なぜなら、自尊心の成功と、性的成功と、社会的成功の三つを結び合わせているからだ。完璧な三角形である。

### 自尊心の正方形

「自尊心の正方形 (carré de l'amour-propre)」と呼んでもよいものが、社会生活の始まりを描く一節のなかにある。

「各々が他人を眺め、また自分も眺められたいと思い始め、そこで公の尊敬ということが一つの価値を持つようになった。もっとも上手に歌い、または踊る者、もっとも美しい者、もっとも強い者、もっとも巧みな者、あるいはもっとも雄弁な者が、もっとも尊敬される人となった。そしてこれが不平等への、そして同時に悪徳への第一歩であった。この最初のえり好みから、一方では虚栄心 (vanité) と軽蔑 (mépris) が、また他方では羞恥心 (honte) と羨望 (envie) とが生まれた。」<sup>16)</sup>〔第二論文第二部〕

ルソーが注釈なしで列挙しているこの四つの言葉〔虚栄心・軽蔑・羞恥心・羨望〕に立ち止まろう。これらを検討すると、それらは多かれ少なかれ同義語であるところか、完璧な正方形を形作っているのに気付く。ルソーは「一方には」虚栄心と軽蔑を置く。この側とは何か？もちろん、自尊心が声望で膨れ上がっている側だ。自我がうぬぼれた状態となる、それはフランス語で「無で満ち満ちた (plein de vide)」を意味する。そして、自動的なシーソー遊びによって、他者は同じだけしぼんでしまう、すなわち軽蔑されることになる。虚栄心と軽蔑はしたがって切り離せない。「また他方には」とルソーは続けるのだが、羞恥心と羨望がある。こちらの側は、自尊心がしぼむ側だ。主体は羞恥心の、自分の無能力と欠格の感情の、餌食となる。他者とその属性はこれとは反対に、主体が先ほど貶められたのと同じように自動的に実際以上の価値を与えられる。それが羨望を生む。したがって自尊心には二つの面があるのがわかる。自尊心が膨れ上がるかしぼむかに応じて、主体は虚栄心か羞恥心の餌食となり、自尊心が他者に投影する感情は軽蔑か羨望である。自尊心が四つの主要な顔に分割されるのがわかる。三つでも五つでもない。そのあとで感情のパレットを多様化することはできるとしても。

ルソーは精神分析家か？

ルソーの心理学はしたがって自尊心の相称的な病理学を区別し、その病理学ははっきりそれとわかる二つのグループに対応している。一方のグループには自分の手柄話で周りの人をうんざりさせて止まない人たちが数えられ、もう一つのグループには、内気で、たえず自分を過小評価しがちな人たちが見られる。けれどもこの二つのグループに姻戚関係がないと考えてはならないだろう。実際には従兄弟同士なのだ。実際には、思い上がりが羞恥心の隠された顔であるのと同様に、自己の過小評価は虚栄心の隠された顔である。そういうわけで、正方形の四つの頂点は互いに繋がっている。

### 理論から自伝へ

虚栄心と羞恥心がいかにして互いに密接に関連しているかを我々に見せてくれるのはルソー自身の事例である。『告白』の一節は、事実自尊心の正方形の一適応例である。もしかしたらその起源かもしれない。ルソーはモリエールの『人間嫌い』のアルセストにならって、自分の行為を社会生活に対する根源的な批判と一致させる決意をした。アルセストは人間たちが余りにも邪悪だと思ったがゆえに、「人跡未踏の地」にひきこもったのだった。ルソーはそこで「自己改革」を企てる。徴税請負人の家の会計係という金になるポストを拒絶して楽譜をコピーして生計を立てることから始め、剣や白のストッキングや立派な下着をやめにし、円形のかつらを採用し、時計を売り払い、偽善しか見えない礼節を軽蔑するふりを装う。次いでパリを去り、デピネー夫人がモンモランシーに誂えてくれたエルミタージュに落ち着く<sup>17)</sup>。

こういう風に世間全体を糾弾し、まるで誰でも人類の上に立てるのだと言わんばかりに社会を自分のスケープゴートとするために示さなければならぬきどりについて、ここでことさら強調する必要はないだろう。ひと

たびその狂気から立ち戻ると、ルソーには自分の訴訟を自ら予審するだけの明晰さと勇気があった<sup>18)</sup> [『告白』 第九巻]。「私を滑稽に見せた」「愚かな思い上がり (orgueil)」について語っている。「それまでは私はただ善良だった。それ以後は徳高くなった。少なくとも、美德というものに心酔した。」自分のことを酔っ払った、熱狂した、雄弁な、内気さを克服した男として描いている。虚栄心に対するルソーの勝利は、ポール・ディエルの表現を借りると勝利に対する虚栄心へと変化した。高揚した六年のあとで、ルソーは初めの態度を取り戻し、ふたたび「小心で、人の気持ちをうかがう、臆病な、一言で言えば昔のあの同じジャン＝ジャックに」戻ってしまった。それだけではない。ルソーは付け加えている。

「この革命が〔彼は自分の反・自己改革の事を言おうとしている〕単に自分自身に帰るというその程度に終わったのだったら、万事好都合であった。だが不幸にも、それはもっと進み、急激に私をほかの極端に引っ張って行った。その時以来私の魂はたえず揺らぎ、休息の線をまったく乗り越えてしまった。しかもその動揺は常に新しく繰り返して、けっして魂を休息の状態に留めるということがなかった<sup>19)</sup>。」

落ち着きを取り戻すどころか、むしろ気づまりになったルソーは、高揚の局面と意気消沈の残酷な局面の、両者の急激で激しい交代の犠牲者だった。ルソーが描く経験は例外的なものであるどころか、きわめて陳腐なものだ。シーソーの揺れ幅が一般にはもう少し小さいとはいえ、ほんの僅かでも自分を振り返ってみれば誰でもその普遍性を確かめることができる。行間に傷ついた自尊心の四つの顔を認めることは難しいことではない。虚栄心－軽蔑の組み合わせと羞恥心－羨望の組み合わせが交互に現れるのがよくわかる。

ルソーは精神分析家か？

## ルソーの延長上に

十七世紀と十八世紀のモラリストたちによって蓄積された精神分析の大きな遺産は不幸にしてフロイトの精神分析には活用されなかった。反対にアルフレッド・アドラー、また後にはポール・ディエルは<sup>20)</sup> 古典主義の精神分析家たちとの連続性のなかにある。自尊心の正方形によって要約される辛い仕組みを働かせるのは、自己尊重 (estime de soi) が子供時代に受けた傷であることを、アドラーとディエルは示した。この苦しい感情はその埋め合わせとして過度の承認の欲求を惹き起こす。もちろん、虚栄心が羞恥心を忘れさせてくれる場合には、他者に向けられた視線は羨望から軽蔑へと移行する。傷ついた自尊心の正方形はしたがってその論理によって悪しき感情の全部を含むことになる。そうした感情は互いに切り離せない。一つが顕現する時、他の三つが遠くにいるわけではない。四姉妹、この四つのペストは、深淵の心理学の仕事の二世紀前にルソーによってはっきりと特定されていたのだ。人間の心理学の基礎はルソーによって五行で要約されていた。いずれにしても傷ついた人間の心理学は、である。だが、誰が多かれ少なかれ傷つかないことがあろうか？ 敢えて言おう。眼の前の確に表明されたのは、まさしく無意識の真の内容なのだ。

自尊心の精神分析においてルソーに先だった古典主義のモラリストたちに関心を抱いたのと同じように、ルソーの後継者たちを思い描くこともできる。ヘーゲルとルネ・ジラルールについてはすでに挙げたが、ヘーゲルは承認の欲求に、ジラルールは無意識的模倣の欲望に、重要性を与えたからだ。自尊心が承認の欲求と無意識的模倣の欲望の背後にあるのを見るのは難しいことではない。アルフレッド・アドラーとジャン＝ポール・サルトルの名前を付け加える必要がある。二人は、アドラーは心理学者として、サルトルは哲学者として、ともに劣等感情と他者の視線の重みを強調した。

ニーチェが分析の中心に据える怨恨（ressentiment）もまた自尊心の心理学に属すると、付け加える必要があるだろう。

### ルソーへの反論

しかしながら重要な指摘が一つなされるに値する。要するにこういうことだ。ルソーは尊重（esteem）の四つの歪みを描いているが、ルソーの叙述には尊重され過ぎとされなさ過ぎのあいだの均衡点が存在しないということ、つまり、自己と他者に対する釣り合いの取れた、節度ある尊重が存在する可能性について考察していない、ということだ。羞恥心の度合いについてもまたほかの三つの尊重の歪みについても、段階というものが存在しない。ルソーの心理学は一度切りで与えられており、個別のケースの多様性に適応することができない。まるですべての人間が同じ悪に同じ程度に悪影響を受けているかのようだが、経験の教えるところでは、意気消沈にも攻撃性にも狂気の沙汰……にも、段階が存在するのだ。

ルソーは思い上がり（orgueil）と内気（timidité）の絶えざるシーソー運動のなかで生き、「休息の線を見出すことがなかった」と先ほど告白していた。こうした線は正当なる自尊心を虚しく探し求める心理の描写にも同じように欠けていた。ルソーは自己愛を復権させたが、しかし自己愛の様々な次元の一つはまさに正しい自己尊重であること、そして正しい自己尊重は社会的妥協のなかで獲得されるのだということをルソーは見なかった。現実には、人間はこのようにできており、自己に対する評価はたえずなされる行為である。こうした節度ある自己尊重は他者をしかるべく、軽蔑も羨望もなく、尊重するために、すなわち、誰とであれ真心のこもった関係を築くために必要不可欠であると、私は付け加えておく。ルソーに反対してこう主張できるだろう。すなわち、友情は二人のパートナーの相互の承認に、すなわち、二つの自尊心の均衡に、存在するのだと。けれども



ルソーは精神分析家か？

そのためには、良き自尊心も存在することを認めねばなるまい。

### 全体論 (holisme) と個人主義

それ自体に委ねられた自尊心から結果する暴力と支配慾によってうんざりさせられている社会生活を、ルソーは、アウグスティヌス流の神学者やモラリストたち、そしてマキャベリやホッブズのような政治思想家たちが見た自然の条件と比べて、邪悪さの点で何ら劣らない色彩の下に描いている。実際ルソーは、承認の欲求が人々のあいだで平和的かつ友好的なやり方で自発的に実行に移されるということを考察していない。モースはルソーと違って、一九二四年に『贈与論』のなかで、ルソーに親しい「良き未開人 (bons sauvages)」の研究にまさに大いに依拠しながら、そうした叙述を行うことになるだろう<sup>21)</sup>。何らかの結びつきのパートナーたちが最終的に贈与と対抗贈与を通して交換するものは、相互の承認なのだ。友情の基礎となる相互の尊重の心理学はルソーにおいてその等価物を見出すことはない<sup>22)</sup>。

すると人はホッブズが残した見取り図と同じような残忍さのなかに再び落ち込むのだろうか？ 違いはこういうことだ。すなわち、ルソーにおける暴力は、人間の心に根差したものとしてではなく、二次的なもの、社会の軋轢から結果するものとして、描かれているということだ。籠のなかに残ったリンゴが相互に接して腐ってしまうのと同じことである。ルソーには死の欲動はない。その結果は大きい。人間はおのずから邪悪なのではなく、ただ同朋との相互関係に入る時だけ邪悪なのだとすれば、その場合、治療の介入は適切な教育または理性的な社会契約の形で可能となる。これこそルソーが、ピエール・ルルーとジョルジュ・サンドが言ったように平等の博士となることを可能としたことだ。ただ、治療法は教育においても政治においても激越だ。ルソーは人類をアウグスティヌスそしてパスカル

的な運命論から解放するが、それは人類を根底的な改革の企てに捧げるためなのだ。『エミール』と『社会契約論』である。

その巨大な長所にも拘わらず、『エミール』は背筋が寒くなる本だ。社会生活の腐敗から逃れるためにエミールが両親から引き離され（なぜならルソーはエミールが孤児であることを望んだから）、そして同朋から隔離されて二十歳まで保護されるということに思いいたる時にである。こういう待遇に現実に委ねられた子供は、いったいいかなる社会的感情を培うことができるだろうか？ こうした子供の性格は同朋とのいかなる日常的な物質的・知的・情動的交換によっても形作られないのではないだろうか？

このラディカリズムと理性主義は『社会契約論』にも見られる。自然状態への回帰は不可能なので、「各構成員がそのすべての権利と共に共同体全体へ全面的に譲渡されることによって」<sup>23)</sup>〔第一編第六章〕、自尊心に由来する全ての悪しき欲動が中性化されるような、そうした一つの社会状態へと前方へ大きく跳躍することを、ルソーは推奨する。ここに引用したのが契約の唯一の条項であって、この契約は最良の意図でどんなに舗装されているとしても、あらゆる全体主義への大きな並木道を開くものだ。引用のなかに tout という形容詞が三回出てくる〔すべての、全体へ、全面的に〕。『エミール』の場合と同じで、贈与と対抗贈与のおかげで人から人へと紡がれる貴重な絆は、ただ国家との垂直な関係だけのために、厳しく阻害される。ルソーはこう求める。「各市民はほかのすべての市民からは完全に独立しており、しかも国家に過度に依存していなければならない。」<sup>24)</sup>〔第二編第十二章〕ルソーの社会は油あるいは小麦粉のような完全な流動性によって特徴づけられる。いかなる結社（association）〔アソシエーション、中間団体〕も個人と国家のあいだを取り持つことはない。ルソーはシャプリエ法〔一七九一年制定の労働者の団結を禁止する法律〕に間接的に責任がある。この法律は大革命時代に結社の禁止を取りきめ、十九世紀

ルソーは精神分析家か？

全体を通じて続いたのだ<sup>25)</sup>。「全体」に好意的なルソーの態度を「全体論的高揚（exaltation holiste）」と呼ぶこともできるだろう。

こうした根底的な整地作業，世界をゼロから再建しようとするこうした意志にそっくり表れているのは，内気で人見知りする性格である。出生をしくじり，母と父と城門を閉ざしたジュネーヴの町とヴァランス夫人以前に寝室とベッドを閉ざしたランベルシエ嬢の傍らからの，早すぎる乱暴な離乳の犠牲者だったジャン＝ジャックの性格がそっくり表れているのだ。

高揚はそれだけではけっしてうまくゆかない。かくしてルソーにおいては，全体論的高揚もさることながら，良き未開人神話に見られるような個人的な高揚も，たいしたものとなる。自然の懷に抱かれて探し求める孤独における個人的な高揚のことだ。『孤独な散歩者の夢想』第五の散歩はこのような独我論的な誘惑に個人的な高揚の完璧な形を与えることになるだろう。ルソーはそこで寄せては返す水によって揺すられる純粹に植物的な実存に身を委ねている。人間諸科学は対立する二つの傾向に分割される。社会を作るのは個人であると考えた場合の方法論的個人主義（l'individualisme méthodologique），それから個人を作るのは社会であると考えた場合の全体論（holisme）の二つだ。ルソーにおいてはこの二つの傾向が同じようによく表現されているのに人は驚かされるかもしれない。ルソーは荒々しいまでに個人主義者であり，また同じくらい熱狂的に全体論者なのだから。ただし，ひそかな通路が二つの両極端を結んでいると内心思う場合は別である。こうした掟は次のような形でポール・ディエルによって表明された。すなわち，高揚した振る舞いを前にした時には，その対極を探せ，と<sup>26)</sup>。既に見たことだが，羞恥心と羨望は虚栄心と輕蔑同様，ひそかに繋がっているのだ。

ルソーにおいては，対立するかに思える自足（autarcie）と融合（fusion）

が、近くにある社会性（sociabilité）を取えて考えないという点で共通しているのに気付かれるだろう。良き未開人と孤独な散歩者には友人はいない。エミールと『社会契約論』の市民にもいない。だから再び二つの絶対主義、二つの過激主義に直面することになる。これがルソーの感受性であって、ルソーはある時は孤独を賞賛し、またある時は集団を賞賛する。『社会契約論』では共和国に吸収された人格を見た。同じことが『スペクタクルに関するダランベールへの手紙』でも見られる。最後の頁のなかではそれを次のように要約している。「人間のなかでもっとも邪悪な人はもっとも孤立した人であり、自分の心を自分のなかにもっとも集中している人です。もっとも良い人は、自分の心情をすべての同朋と等しくわけ持っている人です。」<sup>27)</sup> ルソーの感受性の大きな特異性は、一極から別の極へ、シーソーの或る側から別の側へ我々を揺ることであり、ある時は他者と極端に断絶して自然と融合し、またある時は集団と融合して自己を廃棄し、けっして均衡を見出すことがないことだ。

## 結 論

ルソーの作品はまた別の対照を見せる。それはもっとも偉大な明晰さの光景と同時に、もっと大きな狂気の光景を差し出すことだ。『告白』は結局のところけっして癒えることのなかった自尊心の物語である。しばしばそうであるように、ルソーが心理学者として振る舞うことができたのは自分の苦しみと狂気を分析することによってだったが、しかし『エッセー』を書くことによって自分の意気消沈を癒すのに成功したモンテーニュとは違って、自らを癒すことに成功しなかった。

ルソーは禅ではない〔zen はフランス語では一般に「泰然とした、動かない」の意に用いられる〕！ その最良の証拠はこの自伝の巻頭にあって十九世紀のロマン主義全体のマニフェストとして役立つところの、絶対的

ルソーは精神分析家か？

な特異性の主張である。個人の特異性の明言はその正当性をルソーが自己愛と名付けたもののなかに見出す。ルソーにとって自我とは、もはやバスケルにとってのように憎むべきものではない。喉が渴いた時に飲み、お腹が減った時に食べ、そうしたい欲望を感じる時には愛し合い、疲れた時には休み、寒い時には温まる……という喜びをルソーが復権するのは、私には完全に理解できる。けれども自己愛はルソーと共に遥かに先まで、度外れの差異の表明を表明する方向へと進んでしまう。

『告白』の有名な前書きはその全体が唯一性のしるしの下にある。唯一の人間像……その真実の全体……比較の最初の作品として役立つ……けっして悪いことをしたことの無い人間……自然が私を投げ込んだ鋳型を壊した……かつて例を見なかった企て……その真理の全体……私だけ……私は自分が、存在する誰とも同じに作られていないと敢えて信じる……私は別だ。ジャン＝ジャックは我々に存在する限りのもっとも絶対的な最上級を突き付ける。もちろん我々は皆異なっている。同じ二人の人間が存在しないことは、（たとえ本物の双子でも生活によって違いが出てくるのだから）よく知っている。けれどもルソーは相対的他者性を絶対的他者性に変えてしまう。それこそ彼の高揚であり、ロマンティズム全体を魅了したもののだが、忘れてならないのは、独創性と自律のこのような主張をルネ・ジラルは「ロマン主義的な嘘」と形容していることだ。

これは、自尊心の息の根を止めたと思っているジャン＝ジャックのエゴが現実にはそれ自体自尊心で膨れ上がっているのではないか、と問うことだ。「数え切れないほどたくさんの同朋」が神による最後の審判に参列するだろうとルソーが想像するとき、『告白』冒頭で組織される演出にはおおいに気取りが感じられる。自己に対する羞恥心が超極端な虚栄心に裏がえっているのが見抜かれる。中心に位置する一人ぼっちの自我と、周りに集まって、観客、目撃証人のステイタスに還元された他者たちとのあいだ

の不均衡は圧倒的だ。これは相互性の零度だ。ヨーロッパにおける共和主義思想の創出者は、自分の公的な告解の演出においていかなる自由もいかなる平等も認めない。

私はしたがってルソーが我々の用に供してくれた精神分析の道具をルソー自身のケースに適用しようと努めたことになる。この論考からルソーの姿が無傷で出てくるかは確かでない。ルソーの諸矛盾を明るみに出すことは古典的だ。けれどもそれをルソー自身の分析の道具で行う場合、ルソーの敗北はまたルソーの勝利でもある。ルソーの装置の有効性がすなわちルソーの明晰さの証なのだ。

ルソーは間違っていなかった。四つの悲しい情念〔虚栄心・軽蔑・羞恥心・羨望〕は結局のところ、洋の東西を問わず、すべての宗教、すべての英知、すべての治療法が、様々な方法によって、また様々な用語を用いて、探究するものだ。なぜなら、現在の不安に満ちた生活と他者との関係を、葛藤を惹き起こす激しいものとするのは、この四つの情念だからだ。仏教文化にもおおいに響き合うものがあるのではないかと、私は思っている。

\* 本稿はBruno Viard教授が2013年10月24日に中央大学人文科学研究所で行ったフランス語による講演の翻訳である。〔 〕内は訳者による補足や註などを表す。

#### 注

- 1) Rousseau, *Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes*, G-F, 1971, p. 212. [OC III-219 Note XIV] ジャンセニストのピエール・ニコルは「便宜（心地よさ）の自尊心」と「虚栄の自尊心」を意味深く区別していた。そのほうが多分より明快だろう。しかしニコルはどちらも断罪していた。
- 2) 「二つの愛が二つの国を作った。一つは地上の国で、それは自己への愛から生まれ、神に対する軽蔑にまでいたる。もう一つは天上の国で、神への

ルソーは精神分析家か？

愛から生まれ、自己に対する軽蔑にまでいたる。』（『神の国』一四卷一章一節）。

- 3) もしこの表現を字義どおりに受け取るならば、それは自己愛と同じである。なぜならプロプル (propre) という形容詞は「自分に帰属する」という意味だから。実際にはこの言葉は畏である。まさしくルソー以来、意味を完全に変えてしまったし、文字どおりに理解されるべきでないのだ。
- 4) Jean-Jacques Rousseau, *Rousseau juge de Jean-Jacques*, dans *Œuvres complètes*, tome 1, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1959, p. 669.
- 5) エゴイズム (égoïsme) という言葉は1762年にアカデミーの辞書に現れる。
- 6) Blaise Pascal, fragment n° 100, *Pensées*, éd. Léon Brunschvicg, Le Livre de Poche, 1972, p. 53.
- 7) La Rochefoucauld, *Maximes supprimées*, I.
- 8) 聖アウグスティヌスによれば、キリスト教徒の思い上がりは、人間が神と対等になろうと欲するわけであるから（「汝らは善と悪を知りて神の如くあるならん」と蛇は言う）、形而上学的なヒエラルキーを冒していたのだと、バルバラ・カルヌヴァリは説明している。カインはアダムのあとを継ぐ（Barbara Carnevali, *Romantisme et reconnaissance*, Droz, 2012）。
- 9) *Discours sur l'inégalité*, op.cit., p. 217. [OC III-158]
- 10) *Ibid.*, p. 228. [OC III-169]
- 11) *Discours sur l'inégalité*, p. 252. [OC III-175, 189]
- 12) B. カルヌヴァリによる引用、132頁。
- 13) これはマルクス主義の決まり文句のブルデューによる転倒から書かれている。「順位付けのための闘い (lutte des classements) は階級闘争 (lutte des classes) の忘れられた次元である。」(*La Distinction*, Ed. De Minuit, 1979, p. 564)。
- 14) 〔訳註〕一七二九年にトリノのグーヴォン伯爵家で召使として働いていた時のこと、伯爵家の古いフランス語の銘の意味をルソーが見事に説明し大晩餐会で満座の喝さいを浴びたエピソードを指す。OCI-95-96参照。
- 15) ホップズもルソーもヘーゲルも、ちょうどラモーの甥やジュリアン・ソレルがフィクションのなかでそうであったのと同じように、三人とも揃いも揃って貴族の館で家庭教師をしていたと、B. カルヌヴァリは指摘している。女中を畏にかける貴族のあとに、良家の娘の足下に身を投げる知識人が続く。「私にはお嬢さまが必要だったのだ」とルソーは自分の平民の倫理とまったく矛盾したことを『告白』第四卷 [OCI-134] で白状している。
- 16) *Discours sur l'inégalité*, p. 228. [OC III-169-170]

- 17) Rousseau, *Les Confessions*, II, 8.
- 18) *Ibid.*, II, 9.
- 19) 〔訳注〕『告白』第九巻, OC I, p. 417.
- 20) Paul Diel, *Psychologie de la motivation*, Payot, 1978. ディエルに関する我々の分析は, *Les trois neveux ou l'altruisme et l'égoïsme réconciliés*, PUF, 2002.
- 21) なるほどルソーは自然状態と社会状態のあいだの中間的な段階を, 人間が「健全で, 善良で, 幸福に」生きていた状態を, 描いている。しかしそれは中間的な段階にすぎない。
- 22) ラテン語しか話さない家庭教師と一緒に息子を閉じ籠めたピエール・エイケム〔モンテーニュの父〕が思い描いた方法と比較すべき方法である。ホスピタリズム〔乳児期に入院や施設収容で長期の母子分離を経験した子供に起こる心身の発達遅れや人格障害〕の障害に関するルネ・スピッツの仕事に先だって, ホーエンシュタウフェンのフリードリヒ二世〔神聖ローマ帝国皇帝, 一一九四―一二五〇, 在位一二二〇―五〇〕は, 人間の生得言語は何か知ろうという好奇心を抱いた。そのためフリードリヒは十二人ほどの新生児をプーリア〔イタリア南東部〕の城に閉じ込め, 彼らに言葉をかけないようにと乳母たちに命じた。新生児たちは全員死んでしまった! (Jacques Benoist-Méchin, *Frédéric de Hohenstaufen. Le rêve excommunié*, Livre de poche, 2008)。
- 23) *Le Contrat social*, G-F, 1996, I, 6, p. 51. 〔OC III-360〕
- 24) *Ibid.*, II, 12, p. 91. 〔OC III-394〕
- 25) 四八年の春〔一八四八年二月にフランスで起こった二月革命と三月にヨーロッパで起こった三月革命〕は, アソシアシオンを許可し, 失業中もしくは老齢もしくは病気の労働者のための共済組合設立を企てたとき, その意味で反ルソー的であった。フランスがアソシアシオンを承認するには一九〇一年を待たなければならないだろう。
- 26) 換言すれば, 一つの価値が頹落すると必ず対極にある二つの高揚した疑似価値へと分割される, ということだ。
- 27) Rousseau, *Lettre à d'Alembert sur son article* Genève, G-F, 1967, p. 221. 〔OC V-107〕